

令和2年度 第2回地域福祉活動計画策定・推進評価委員会 会議録

日時：令和2年9月10日（木）18：30～20：20

会場：練馬区役所 本庁舎地下多目的会議室

1. 事務局挨拶

職員：第2回地域福祉活動計画策定・推進評価委員会に出席いただき感謝申し上げます。今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、第1回を文書での開催とし、第2回はオンライン（ZOOM）を活用した開催とした。会場の密を避けるため、職員の参加も限定し約30名が参加している。策定・推進評価委員の出席状況は、会場8名、ZOOM参加3名、欠席5名。大木委員の代理として練馬区福祉部管理課地域福祉係原本係長が参加している。通常であれば、大羽常務理事が挨拶をするところ、欠席のため、代理で挨拶させていただいた。議事に入る前に、報告がある。

職員：長年、策定・推進評価委員にご協力いただき、民生委員でもあった河本道雄さんが、6月末に逝去された。光が丘地区で民生委員を長く務め、地域福祉活動計画へも、民生児童委員協議会の代表副会長として参加いただき、約15年、第2次～第5次の計画策定までご協力いただいた。特に第3次計画では、小地域福祉活動を練馬地区と光が丘地区をモデル地区としてスタートした際に、光が丘の大きな地図を広げて、熱心に教えてくださり、励ましてくださった。その後も青少年育成委員としても活躍され、楽膳倶楽部ではお弁当の配達や相談情報ひろばのスタッフなど、様々な活動を続けられていた。お別れ会として、自治会の皆さんに見送られ、私たちが参列させていただいた。ご冥福をお祈りして、ご報告させていただく。

2. 新任委員への委嘱状交付

本日は欠席だが、練馬区で人事異動があり福祉部管理課長が吉岡課長から大木課長へ変更し、新たに策定・推進評価委員として委嘱した。

3. 配布資料確認

4. 練馬区地域福祉計画について 【資料1】

練馬区では、令和2年3月に地域福祉計画を策定した。民生児童委員協議会の田中代表会長や社会福祉協議会の河島課長にも委員として参加いただいた。権利擁護部会では、部会長として飯村委員にも参加いただいた。地域福祉計画は、地域福祉活動計画と連携を図りながら取り組みを進めていくこととしており、計画期間も地域福祉活動計画と同じく令和2年度からの5年間としている。

地域福祉計画は、基本理念として、「共感」「協働」「安心」3つの理念を掲げ、「ともに支え合うずっと住みたいやさしいまち」を目標として、5つの施策を掲げている。従来の計画から変更した特徴的な点が2点ある。1点目は、社会福祉法の改正の趣旨を踏まえ、地域共生社会の実現を目指した包括的な支援体制づくり、福祉の各分野で共通して取り組むべき内容について計画に盛り込んでいる。5つの施策のうち施策2に当たる部分に盛り込まれている。2点目は、成年後見制度の利用を促進するため、施策5として、成年後見制度を中心とした権利擁護が必要な方への支援について盛り込み、成年後見制度利用促進基本計画として位置づけている。

取り組み項目について、特に社協とのかかわりが深い部分について説明する。

施策1：「区民との協働と地域との支え合いを推進する」

事業番号8：「地域福祉コーディネーターによる地域福祉の基盤づくり」について、社協に地域福祉コーディネーターを配置して地域福祉推進の基盤となる地域支援ネットワークの構築を推進すること、ネリーズの意義を伝えキーパーソンとも協働して地域づくりを進めることについて、記載されている。地域福祉活動計画のポイントであるキーパーソン・ネリーズ・地域福祉コーディネーターの協働した地域福祉づくりについて触れている。

施策2：「福祉サービスを利用しやすい環境をつくる」

事業番号17：「生活困窮世帯の自立支援の推進」として、生活サポートセンターを拠点とした生活困窮者自立支援事業の取り組みについて記載している。

事業番号25：「災害ボランティアセンターの運営」について記載している。

施策3：「ユニバーサルデザインに配慮したまちづくりを進める」として、道路・建物・公園などハード面のバリアフリーについての取り組みを記載している。

施策4：「多様な人の社会参加についての理解を促進する」として、ユニバーサルデザインの理解、多様な人との相互理解の促進など、ソフト面での取り組みを取り上げている。

施策5：「権利擁護が必要な方への支援体制を整備する」は、成年後見制度利用促進基本計画として位置付けた部分となっている。内容の多くは権利擁護センターの取り組みと重なっている。これまでも権利擁護センターは、成年後見制度の推進機関として、相談支援・周知啓発について取り組んでいたが、今年度4月から、練馬区は、成年後見制度の利用促進にかかる中核機関を練馬区社協に委託し、これまで以上に、地域連携ネットワークの構築などにも一層力を入れていただいている。また、法人後見の実施、地域福祉権利擁護事業の充実にも取り組んでいただいている。

新型コロナウイルスの影響で、計画通りに進まない部分や当初の計画を修正していく必要がある部分も少なからずあるのではないかと考えている。

本日、計画のすべてを説明することはできないが、ぜひ、本編にも目を通していただき、ご質問やご意見があればお寄せいただきたい。

委員：施策3の「ユニバーサルデザインに配慮したまちづくり」とは何を目指しているのか。

委員：主にハード面での取り組みとなっている。例えば、駅から施設まで道に段差がないように解消していくことや建物自体のバリアフリーを進めることなどが主な内容となっている。

5. 策定・推進評価委員のみなさまよりいただいたアンケート集計より(各委員より)【資料1】

委員：みなさんの意見が網羅され見やすいと思う。関わった委員だけでなく、もっと多くの人に見てもらうことが大事だと思う。

委員：内容的にはこれが実現すればよいと思っている。現状は、暮らしを支える制度が細くなっているように感じ、我々がどのように補い対応していくのが大事だと思う。また、地域が捕えにくい状況になっていることが課題だと思っている。具体的には、生活保護の基準や年金が下がるなど、生活に直結する基礎的なところが厳しい状況になり、制度につなげたがそれが頼りにならないという状況をとても心配している。

委員：よくできていると思う。これからの行動、実行が大切だと思う。絵に描いた餅にはならないように、具体的に行動することが大切だと思う。

委員：本編、概要版ともに見やすいということがとてもよい。まず、多くの人に見てもらうことが大事で、中の人たちだけで考えても進まない。コロナ禍で人が接することができない状況にあり、弱い立場の方が見えなくなっていることが怖いと感じる。計画が順調に進めばつながることができ、キーパーソン・ネリーズ・地域福祉コーディネーターの存在がとても大事になってくると思う。

- 委員：新型コロナの影響は、私たちの生活や活動にとってとても大きい。私たちの存在はアナログで、直接会ったり、何らかの形でコミュニケーションをリアルに取らないと分からない課題や問題があると思う。感染症対策と社会活動の二面性のもが同時に動いていて、それを考え続けて取り組んでいくことが課題だと感じる。3月以降、感染症対策の通知が厚生労働省からたくさん届き、それに基づきできるだけ休まずにやってみたが、基本的にはこれまでの感染症対策で良く、換気や3密を避ける・マスクをつけるということが加わった。生活の様式が変わりつつも、コロナ禍での課題も増え、相談も増えている。他の関係団体も同じで、より必要な人に活動がしにくくなっているという中でどのように進めていくのか考えていけないといけない。第5次計画はイラストや事例が多く、広く伝えていけるツールになる。計画の内容を試行錯誤しながら進めていくことが必要だと強く感じている。気持ちが自粛してしまうようなところがあるが、こういう時こそ前に出るといった気持ちを忘れずに進めていけないといけないと思っている。この計画書がみなさんの生活をよりよくしていくために、よきバイブルのような形になっていくと良いなと強く思っている。
- 委員：冊子の感想としては、字が大きくて嬉しい。社協らしい優しい見やすい形になっていると思う。心配していたキーパーソン・ネリーズの役割の説明が分かりやすく、可愛いイラストが入っているので、興味を持っていただけると思う。私たちの団体は小さく、マイノリティの方が多いが、相談がとて増えている。この計画を区民の方が見て、この人がキーパーソンかなと思ながら相談をしてきたときに、それを実現し、助けになりどこかにつなげることができる働きが、社協の中でとても重要な仕事になってくると思う。今現在でも、コロナ禍で相談が殺到しているので、相談者を福祉につなげていくことが大変。みなさんからの相談が殺到したときの体制も私たちが本気で考えておかないと、計画を配った意味がなく、区民のみなさんががっかりしないようにしておかなくてはいけないと感じた
- 委員：第4次から第5次、それ以前から大きな特徴として「ひとりの不幸も見逃さない・・・」の理念をずっと掲げ、一人ひとりの気づきをお互いの育ちにつなげていくと表現できていることが、一貫性があると思う。第4次計画と第5次計画を見比べ、第4次は、地域福祉コーディネーターが主語で書かれていることが多かったが、第5次は、一人ひとりがという主語が増えたところが、計画そのものが少しずつ成長していると感じた。地域共生社会の中では、多様性に応える、それぞれの生き方に応えるということが大きなテーマだが、コロナ禍以後の今の社会状況では、地域共生社会自体がどんな状況でも揺るがないという視点が大事になってきていると感じる。この半年間で、子供達も一人ひとりの違いによって、過ごし方や体力差に開きが出ていると感じ、目に見えにくいのが、地域で起きていることがたくさんあると思ひ、それを大切にすることも計画の推進になると思う。
- 委員：会の理事や関りのある住民の方に読んでもらった。皆さんから読みやすく、優しいと言われたが、そもそも社協は何をすることなのかと質問があり社協の説明もした。住民の中には、社協がどんな団体なのか分からない、身近に感じられないという人がまだまだいると感じた。コロナ禍で緊急小口資金を紹介し、社協のことを初めて知った方もいた。困ったときにこういう冊子があるということを知ってもらえることが一番良いと思う。利用者は、漢字が難しく、なかなか読めなかったようだが、概要版はイラストが描いてありとても分かりやすかったと言っていた。あえて言うなら、概要版にはルビがあっても良かったと思う。利用者の中には、障害があっても、地域の役に立ちたいと思ひ、自主的にゴミ拾いをしている人もいて、この人もネリーズだと思う。視覚障害者にも読みやすいようにコードがついているので、知的障害者にも読みやすいものになると良いと思った。
- 委員：読みやすい計画が出来てとても良かったと思う。このような計画は、作る過程で色々盛り込みた

いと思い、それをいろいろな地域住民に読んでもらい活用していくかがとても大切で、中身を伝えることが難しいなかで、工夫された計画になったと思う。地域福祉に参加することが多様な形で良い、それぞれの地域住民が自分たちでできることはたくさんあり、社会福祉の専門職でなければできないことばかりではないということを広くアピールできたことは良かった。これを活用していく場ができると思う。

委員：みなさんのお話にも私も同感。絵本のような、特に概要版は絵本を読むような感じで手にとる事ができ、良かったと思う。計画を作る過程で、地域で活動している人の話を聞く場面をつくり、懇談会を行い、その内容が中に反映され、計画を行動化するためにも大切なことだと思う。社会福祉の専門職の人だけがやることではない。実習生を受け入れており、学生とリモートでやり取りをすることがあった。当事者のメンバーと学生が話をした時、若い学生にも希望が持てると感じた。「支える・支えられる」ということにこだわって活動してきた。学校だけで勉強していると、自分は支援者だという感じで地域に出ていくことが多いが、いつもそれは違うのではないかと思っている。地域には、既にたくさんの活動をしている人がいて、当事者から与えてもらうこともあるからこそ続けていけるということがあり、そのことを学生に話したときに、学生が驚くほど理解してくれた。この会議でも議論した、地域福祉的な視点、地域が変わらなければ、一人ひとりには幸せにはなれないということがとても大事なことだと実感した。専門職という権威があるような気になってしまったりする。専門職とつながって解決していくということも大事だが、誰かにやれと言われてやる活動ではなく、一人ひとりの気づき、障害があってもなくても、支えられる側だと言われる人も、環境を作っていくことが一人ひとりの幸せにつながっていくと思う。改めて、第5次計画がうまく進んでいくと良いと思った。

委員：アンケートの集計の中に、「危惧していること」という項目がある。地域住民からも「キーパーソンは社協が住民にキーパーソンになれると言われるようになるのか」と聞き、住民の主体で自分から動くものだと説明するやり取りがあった。計画を読み、そのように感じている方もいるということが心配になった。

委員：コロナの問題を経て、社会は大きく変わるのではと思う。今は、資本主義社会が行き詰っている。資本主義がこのまま続けば、地球は大変なことになるなかで、住民の価値観も変わってくると、住民にとって新しい価値とは何か、福祉や行政の中で新しい価値を見出さなければいけない。第5次計画やコロナ禍を契機として、社協が活躍しやすい環境になってほしいと思っている。今すぐではないが、住民が新しい価値に注目する時代が来るとしている。

6. 第5次地域福祉活動計画の推進・評価について 【資料2-1・2-2】

推進部会では課長、各部署の所長と職員で構成され、その中で戦略班、評価班、運営管理班に分かれて今年度の計画推進について検討、運営管理を行っている。

計画推進の戦略・ポイントについては、策定委員のみなさまからいただいた先ほどのアンケートの回答をふまえて、4つの項目を立てた。1つ目の項目は、「コロナの影響をふまえた取り組み」として、コロナ禍の状況においてもこれまでのつながりを断つことなく、さらに新たなつながりをつくるためにオンラインを利用したり、顔を合わす場合は少人数で、情報発信もSNS等を活用しながらより多くの人が参加できるネリーズ懇談会や交流会等を行っていきたくて考えている。2つ目は「広報や参加媒体の多様性を図る」としてオンラインや動画など新たな媒体を駆使しながら、社協のホームページやネリーズ通信といった従来の媒体を充実させ、新たな情報格差を生まないよう意識をして、様々なツールで重層的に情報発信を行っていきたくて。3つ目は「ネリーズの見える化」として、社協職員だけではなく、ネリーズや区民のみなさんと一緒にネリーズ通信等を作成したり、ネリーズのことを知ってもらえるよう、ネリーズのみなさんが主体となって各々の気づきを広められるような情報発信をしたり、ネリーズ同士の連携も深めていきたくて

いと考える。4つ目は、「多様なキーパーソンとの協働の形を共有する」とし、キーパーソンのイメージがつきにくいというご意見もあり、第5次計画の本編と概要版ではイラストで示したが、ネリーズ、キーパーソン、地域福祉コーディネーターの協働が具体的にどういうものかを日頃の事例を積み重ねながら、協働のイメージをわかりやすく住民へ発信していきたいと考えている。また、本編と概要版のイラストの事例以外にも、各部署や社協事業の中で地域住民と一緒に課題解決に取り組んでいることもあり、キーパーソンとの協働だということを社協職員一人ひとりが意識をし、キーパーソンを知っていただくためにそれらの取り組みを地域に見える化し、発信していくことも必要であると感じている。

以上の推進・戦略にあたって、資料にチーム編成と記したこれらの4つ、「ネリーズ通信」「オンラインを含めた懇談会」「ホームページ」「キーパーソン事例の整理・分析」のチームに分かれて取り組んでいきたいと考えており、策定委員のみなさんとも一緒に進めていきたいと思う。

計画推進の評価について、第5次計画の柱、その柱に対しての取り組み項目、取り組み内容、部署・委員会の取り組みをお示ししています。この表は本編のP43～P44にも掲載している。部署・委員会の取り組みの評価がしやすいように、各部署や各委員会の取り組みを具体化したものを表の右側に追加した。評価方法についても委員のみなさんと一緒に考えていきたいと思っているので、よろしくお願ひします。

委員：第5次計画の推進を評価をするにあたり、チーム編成をという初めての取り組み。職員だけでなく、委員の皆さんにも得意分野を活かして参加してほしいとのこと。取り組み表は、これらが実行されているかを確認していくものとなっている。コロナの影響もあり、これまでの計画と変更せざるを得ないこともあるかと思うが、ご意見いただきたい。

委員：新型コロナの当会への影響としては、幅広く福祉サービスを行っている中で、最も影響を受けたのは、移動支援と日中一時の余暇支援部。利用者もコロナが怖くて出かけられないという声が多いが、落ち着いたらあれこれやりたいとの声もある。発達支援部や就労支援部では、オンライン個別指導を行い、言語療法などの訓練をやっている。コロナ禍で誰とも話せず、ストレスが溜まっている親子も多く、オンラインでも顔が見えることの安心感があった。就労支援部は定員を半分にし、午前午後で半数ずつの通所にした。生活介護への影響も大きく、親も高齢で一日家で過ごすことが出来ず、一時的に生活介護に預け、グループホームでショートステイの部屋を区切るなどの対応をして緊急的に受け入れた。共通しているのは、コロナそのものよりも人に対する恐怖心が強く、感染した場合の周囲の視線が怖いと感じている。当会では、何ができるのかと考え、今は暗いトンネルの中にいるが、トンネルには必ず出口があるので、みんなで乗り切っていこうという動画を作って配信している。初めは利用者にも職員にも混乱があり、生活やいつものパターンが崩れひきこもりになってしまった人もいた。職員有志で土日に支援をしたり、福祉サービスだけでは限界のある方法を違う形で補っている。職員の会議などもオンラインでしているが、何事も備えあれば憂いなしで、BCP計画も大切だと思った。

委員：民生委員の活動自体が、地域の見守りをしたり相談を受けること。民生委員自身も高齢者が多く、できるだけ電話相談に変えたり、住民に会う時は感染症対策をしての活動となり、活動数が減っている。特に、相談・調査などの件数が減っている。その代わり、関係機関等との電話連絡が増えている傾向。今度、ますます工夫しなければ、積極的に動くことが出来ず、皆さん苦勞しているとの話を聞いている。

委員：一時、作業所を完全閉所とした影響で、怖くて外出できなくなってしまった人もおり、そのアフターフォローが課題になっている。普及啓発としての販売や周知活動ができず、利用者や障害者のことを知ってもらおうという機会や施設行事も企画できていない。他の社会福祉施設なども同じ経験をしていると思うが、国や都、区などの機関から通知が大量に届き、読み切れない状況。行政は、現場に寄り添った情報提供の方法に工夫してほしい。何が大事か、利用者の対応や啓

発活動に右往左往している状況を理解していただきたい。普段はあまり注目されることはないが、この状況だからこそ、活躍している人がいることが分かった部分もあり、自分も、社会（産業）の支えになっているという感覚にもなった。

委員：世界レベルでコロナ感染症がみんなの生活を大きく変えている影響がある中で、気が付いたこともたくさんあったと思いたい。例えば、保健所。憲法25条の第2項を痛感し、公衆衛生がいかに大事なのかということに改めて感じた。このような大事なことを地域住民の一人ひとりが支えているということに改めて感じた。コロナの時代は、短期間では終わると思えず、お互いがいかに支えていくか、現状は、漠然とした不安が物理的な距離だけではなく、人と会話したり、お互いに寛容に理解しよう、人と寄り添おうということから遠ざけてしまう。場合によっては攻撃をしてしまうということに流れてしまいがちだが、その中で、現場の人たちが、身近な社会の中で、自分が生きて存在している、活躍している価値を再発見する時代になってくると思う。色々な組み合わせが大切になり、オンラインというツールはとても便利だが、対面とは全く別物と考えており、オンラインが完全に代替するものではない。便利だが、そうでない部分もあり、その組み合わせを豊かに開発出来たらよいと思う。新しい時代の地域福祉は、現場から開いていくということはこの機会にみなさんと共有していけたら、明るい未来に向けて私たちができることもたくさんあると思っている。

委員：福祉人材センターでは、福祉従事者からの相談を受けており、昨年よりも相談が増えている。福祉人材センターでも、体験型の事業はすべて中止。次世代が福祉業界の中で、見て・気づいて・感じてという体験がなかなかできない中で、それを代替できるものはないかと考えるが、気づきというのは、見て、感じてもらうことが、体験の手法が奪われた中でとても難しいことだと感じている。医療従事者だけでなく、福祉従事者が悩みながら地域の中で頑張っていることを、支え・支えあうという視点でも、専門職の方が、上から教えるのではなく、利用者と一緒に地域に出てその姿を見せることによって、従来の方法が出来ない中で、どのように見せることができるのかが大きな課題だと思った。

委員：コロナの影響は大きい。当事者と会って話さなければいけないが、相談が増えているので、会う回数も増えている。小さな事務所では、人数に限りがあるが、小さな子供を連れていても、話を聞いてほしい、助けてほしいという思いで来て、緊急の方もいるので、延ばすことも断ることもできず、何とかしのいでいた。なぜコロナ禍でDVが増えるのか、夫が自宅勤務になり問題が起きたという人が多い。父親が家にいて良いという家族と2極化していることが明確に見えてきた。日本中で相談が増え、国が相談窓口を立ち上げた。そのような状態の中で、何ができるのか、練馬区にいる方の話は、一人残らず聞きたい、どこかにつなげなければいけないと、何とかやってきた。メンバー30名くらいが、2～3組に分かれて活動していたが、活動場所がなくなってしまった。WEBも使ったが、自分だけの話を聞いてもらうことが出来ず、遠慮がちになり、難しさを感じた。打ち合わせはWEBでできるが、サロンのように集まるということがとても難しいということが分かった。裁判所も閉所し裁判が進まず、ストレスを強く感じている人をピックアップし、その人の話を聞くための、少人数のサロンを開くなど、緊急性の高い人を中心に行った。婦人保護施設を退寮して地域住民になった人達の支援では、携帯を使える人も少なくパソコンも持っていないため、連絡もできず、ひきこもってしまい、外に出ることに恐怖も感じていたが、説得して訪問することにした。また、引っ越し案件もあり、物件がなく引っ越ししにくい、行動を妨げることも多かった。この状況が続けば、さらに多くのことを考える必要があると思う。

委員：3月頃から感染症対策を本格的に始めた。3～4月はどうに対処すればよいかと手探りで、持ちうる限りの知識を使って対策をしていた。4月頃が一番利用者が増え、通常40～50名程度の家庭のことも多かったが、20名程度の高齢者等も増えた。居場所がなくなったため、弁

当を取りに来たついでに話をしたいという方が増えた時期が1ヶ月程度続き、対応できずに遠慮してもらわざるを得ず、心苦しかった。利用者は母子家庭の方が多く、休校が始まり食費が多くなり困ったという相談も増えた。6月からは、お弁当だけでなく週1回の配食サービスも始め、毎回50件くらいの利用、今まで子ども食堂に来ていた方が毎回来ている。親は、何とか仕事はできているが家事が増えてしまい、子供の相手や在宅勤務の時間も多くなりイライラしてしまう。子どもは、どのように勉強すればよいか分からず、親も子どもストレスがたまり、先が見えない状態に不安を感じていた。お弁当や食材を取りに来てもらう時に、母親と話すようにした。不登校の子供たちも支援しているが、休校中は不登校の子供たちが「天国だ」と言い出し、登校していないことへの無言の圧力を感じていたことがよく分かった。このまま学校が始まらなければよいと話すこともあり、同じ状況にいるが、まったく違うとらえ方をしているということが印象的だった。今は、学校が再開し、新しい生活様式が子どもたちにとってはとても窮屈だという声が聞こえてきている。それを理由にできない子供たちも増えている。大人たちはやりくりができるが、子供たちはその場のルールを健気に守っている。そこの是正を大人や母親たちが頑張らないときつい状況が続いていく。支援する側としては、母親のサポートや子どもたちに姿勢を見せていくことが大事で、かつて、命を大事にするためにここまで社会が動いたことはなかったのではないかと感じ、同じくらい、貧困の子どもたちや不登校の子供たちに社会がくれたらどうか、直接精神には関わらないが、発育には関わる問題なので、誰のための対策だったのかと考えたときに、自分の立場としては、子供たちに何ができるのか、コロナだから自粛しなければならないではなく、こういう状況だけど、こういう風にやってみようかと考える機会や、お互いを尊重する機会に慎重にやっていくという、考えることは大変だが、頑張っていかなければいけない機会だと思い、そのことを子供たちと一緒に考えるようにしている。今の過程を大人たちがやっているから従ってもらうのではなく、一緒に何かを考えてもらうことで、次の危機が起きたときに考えて動ける人になってくれるのではないかと期待している。答えがないので、難しい面もあるが、答えがないことを考えていくというプロセスを大事にしている。

委員：子ども食堂、食のほっとサロン、相談情報ひろばなどは6月まで閉所せざるを得ない状況だった。7月から1ヶ月程度通常に戻したが、来所者の感染への心配が強く、来所されなかった。8月からは半日にしている。家族に外出を止められている高齢者もいた。一人暮らしの高齢の方は、自分が外に行けない不安で鬱になってしまう方もいたため、1か月に1度でも電話や手紙で連絡し、外部と繋がっていることを実感してもらえるようにした。子ども食堂は弁当にして届けることで、家庭の様子を見たりした。学校も外部の人に入ってほしくない状況で、学校公開も再開されたが、人数を限定して行っている。学童や学校応援団等にも、外出することで感染するのはどの恐怖で、外出させない家庭も多い。夏休みにひろばもやっていたが、来所は今年の半分以下だった。クラスターのもとになることが怖い、感染源が自分になることが怖いという恐怖が続いている。

委員：具体的な身近な問題では、大学生の孫から、バイトがなくなり収入がなくなり月謝が払えない、実家にも帰れないという話を聞いた。飲食店はみんな赤字。新しい時代になり、外食も淘汰され、相当数が失業することになる。飲食店で働いていて、家族を抱え、ローンなども払えない、進学できないことが想定される。それは未知との遭遇。新しい世界に対して、どのようなことが起きているか気づくことが大切。集まることは難しいかもしれないが、ネリーズ一人ひとりが集まって、どうしていくか考えていくことが大事だと思う。

委員：推進するにあたっては、地域の状況を知っておきたいと思い、みなさんに話をしてもらった。評価については、今後、計画が進むにしたがい表に基づいて評価していくことでよいか。

職員：評価方法は私たちも模索しており、委員からの意見をお願いしたい。評価のポイントも、委員のみなさんと一緒に取り組んでいきたいと考えている。計画通りにいかないこともあると思うので、

地域の声も反映しながら考えていきたい。

7. まとめ

副委員長：初めての経験で、あれこれできない状況だが、不登校の子供が生き生きとしている、引きこもっていたメンバーに在宅支援が出来るようになり本人も生き生きとしているなど、関係ないと思っていたことが起きている。ボランティアも増えたのでなぜかと思ったら、遠くに行くことが出来ず、近場でできることをやろうと考えた人が増えたようだ。高齢者だけでなく障害のあるメンバーも、怖がってあちこちに行かれず、強く警戒し自粛していた。それがマイナスとなって現れ、精神的にも体力的にも動けなくなってしまっている状況を感じたため、自粛を緩め、前の生活を取り戻そうとしている。この状況の中で、できないことではなく、できることを考えていく視点を持ちながら乗り越えていかなければいけないとあらためて思った。皆さんの気づきと知恵を集めて、この計画が進んでいくと良いと思う。

委員長：第5次計画は今後5年間の計画。これからスタート、皆さんとともに取り組んでいけたらいいと思っている。

職員：計画推進のチーム編成については、得意分野を活かした立候補をお願いしたい。事務局からも声がけさせていただく。

8. その他

9. 次回の日程について：

日時：令和2年12月18日（金）18：30～ Coconeri 研修室1

以上